

いわゆる過疎地域の家族関係 (10)

— 子どもに対する役割期待について (その2)
長野県上村と熊本県水上村の比較検討および
全体的考察 —

松田 惺¹⁾・久世敏雄ほか 過疎研究グループ

I 目 的

本報告は、前報告(松田ほか, 1972)においてとりあげられた2地域以外で、同様の分析に耐えうる2地域、長野県上村と熊本県水上村とをとりあげた。分析の目的は前報告と同一であり、「過疎」の進行に伴って、跡取りを含めた子どもに対する役割期待にどのような特徴が示されているかに焦点をあわせ、それを、子どもの役割意識のあり方や、親の職業人としてのアイデンティティと関連させながら分析することを意図している。

そして、あわせて、非構成的面接調査からの資料分析についての方法的検討も行なうことになる。

はじめに、天龍川支流の遠山川沿いにある長野県上村と、球磨川上流にある熊本県水上村の比較検討を行ない、後に、前報告の2地域をもあわせて、4地域間の比較検討および全体的な考察を進めようとする意図している。

II 方法および手続き

1. 対 象

序報(続ほか, 1970, 1971)においてとりあげられた

5地域のうち、一応十分な資料が得られている4地域がとりあげられることになる。

表1 対象町村の地理的特徴†

地 域→		頓原町 (島根)	大蔵村 (山形)	上 村 (長野)	水上村 (熊本)
↓事 項					
人 口(人, 1970年度)		4,145	6,080	1,355	4,410
世帯数(戸, 1970年度)		1,071	1,211	383	1,078
面 積	総面積 (km ²)	124.6	212	126	170
	耕地面積 (ha) (1世帯当りa)	755 (70.5)	1183 (97.7)	77 (20.1)	375 (34.8)
	山林面積 (km ²) (総面積比%)	110.5 (88.6)	170 (80.0)	120 (95.3)	155 (91.0)

† 続ほか(1970, 1971)に基づく。そのため、一部推定値が含まれている。

表1に示されているように、前報告でとりあげられた島根と山形の2地域は、1世帯当りの耕地面積もわりに広く、また、表2に見られるように、対象者の中で1.1 ha

表2 調査対象者の地域別職業一覧†

地 域→		頓 原 町 (島根)	大蔵村沼台 (山形)	上 村 (長野)	水 上 村 (熊本)	計
農 業	田 1.1ha 以上	14 (35.9)	19 (47.5)	2 (2.8) ^{††}	22 (50.0) ^{†††}	114 (58.5)
	田 1.0ha 以下 (酪農その他兼業)	15 (38.5)	14 (35.0)	28 (38.9)		
林 業	林 業 経 営	0	0	2 (2.8)	1 (2.3)	3 (1.5)
	林 業 労 務	1 (2.6)	0	15 (20.8)	11 (25.0)	27 (13.8)
公 吏 (役場・郵便局)		2 (5.1)	0	6 (8.3)	1 (2.3)	9 (4.6)
商 業・自営業 (建設・大工等)		3 (7.7)	1 (2.5)	13 (18.1)	3 (6.8)	20 (10.3)
そ の 他		4 (10.3)	6 (15.0) ^{††††}	6 (8.3)	6 (13.6)	22 (11.3)
計		39(100.0)	40(100.0)	72(100.0)	44(100.0)	195(100.0)

† ()内は%

††† 経営規模は大方不明である。

†† 田畑をあわせて1.1 ha以上。

†††† すべて農業であるが、経営規模が不明である。

1) 名城大学教職課程部助教授

以上の田を持つ者が、かなりの比率を占めているのに対し、本報告で主として分析する長野と熊本の2地域は、耕地面積が狭く、林業労務者の比率の高いこと、および、田畑の経営規模の小さい者の多いことが注目される。

対象者の決定において、職業等に基づいた層化抽出法の如きはとられていないので、得られた対象がそのまま各地域の特徴をあらわしているとは言い難い。しかし、一応、長野と熊本の2地域の間には、最も重要な生活の基盤に関して、ある種の共通性があると考えてよく、この2地域のみをまず比較することの意義はあると考えてよいであろう。

2. 資料分析の方法

すでに作成されたカテゴリー（松田ほか，1972）に基づいて、長野県上村および熊本県水上村の面接調査資料の分析を行なう。また、2地域間の質的な比較を行なうため、年齢・家族構成・職業形態等で比較的対応する家族を選びだし、事例的な分析も行なう。本報告では、さらに、両地域の中学生全員を対象に実施した文章完成法調査 KASC²⁾の分析を通して、地域間の差異についての検討を進める。この調査 KASC の調査対象者を表3に示した。

表3 調査 KASC 対象者†

	上村中学校		水上中学校	
	男	女	男	女
1年生	13	11	55	53
2年生	13	16	48	39
3年生	18	18	41	54
計	44	45	144	146

† 2地区の中学生全員に施行した。表は有効回答数であり、整理の都合上、片親の者は除外されている。

このような2地域間の比較検討を経た後に、前報告の地域もあわせた4地域間の資料を比較しながら、全体的

- 1) 続 有恒ほか「長野県上村における採集資料(1)」名古屋大学教育心理学科研究資料 No.3, 1971
続 有恒ほか「長野県上村における採集資料(2)」名古屋大学教育心理学科研究資料 No.5, 1972
続 有恒ほか「熊本県水上村における採集資料」名古屋大学教育心理学科研究資料 No.6, 1972
- 2) 上村中学校は1971年7月22日、水上中学校は1971年7月14日、それぞれ学級担任を通して実施された。島根および山形では実施されていない。項目については附表1を参照されたい。

な考察を行なう。

3. カテゴリー分類の信頼性

得られた面接記録から、該当するカテゴリーへの分類を行なう作業は、筆者単独で行なったのであるが、その信頼性をチェックするために、前報告で扱った事例のうち、両地域10例ずつ、計20例について、1年経た後で、全く同一の手続きでカテゴリーへの分類を行なった。

表4 記述分類の信頼性（再分類による）†

	第1回分類記述数	第2回分類記述数	同一カテゴリー分類数	同傾向カテゴリー(同一を含む)分類数(第1回に対する%)
頼原町(10ケース)	111	169	31	64(57.7)
大蔵村沼台(10ケース)	138	213	30	79(57.2)
計(20ケース)	249	382	61	143(57.4)

† 第1回—1972年9月、第2回—1973年9月

表4に示したように、同一の面接記録を、同一の手続きで分析しながら、とりあげられた応答数およびその分類のされ方において、必ずしも第1回目と、1年後の2回目との間に十分な対応が見られたとは言い難い。全く同一のカテゴリーに分類された応答は非常に少なく、パターン分析に用いたカテゴリー群への分類でも、約57%という一致率しか得られなかった。

今後、カテゴリーについての検討を行ない、その内容をもっと厳密なものにして、信頼性を高める工夫が必要と思われる。しかし、本報告では、こうした信頼性の問題をふまえて、今回得られた分類そのままに基づいて、以下の分析および考察を進めていくことにする。

III 結果および考察

A. 長野県上村および熊本県水上村についての比較検討

1. 応答カテゴリーの分析による2地域間の比較

i) 後継者への役割期待について

長野県上村(以下「上村」)と熊本県水上村(以下「水上」)における、子どもに対する役割期待のあり方ととりあげたのが図1、表5および附表2である。なお、表5には、後に考察する他の2地域について資料もあわせて提示した。

まず図1から見ると「信頼」「強制」「不安を伴った期待」などのように、後継者に望みを託す傾向が水上に強いのであるが、一方で「混乱」とか「放任」などの発

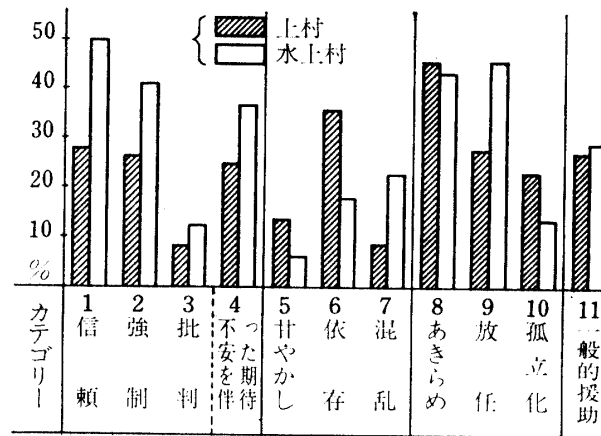


図1 後継者に対する役割期待・態度
(各カテゴリーへの応答者数の%)

表5 後継者に対する役割期待 (パターン・4地域)†

パターン群	上村	水上村	頓原町 (島根県)	大蔵村沼台 (山形県)
A. 安定群	13 (18.1)	11 (25.0)	5 (12.8)	15 (37.5)
B. アンビバレント群	12 (29.2)	19 (43.2)	13 (33.3)	14 (35.0)
C. 悲観群	31 (43.1)	13 (29.5)	15 (38.5)	5 (12.5)
D. 不明群	7 (9.7)	1 (2.3)	6 (15.4)	6 (15.0)
計	72(100.0)	44(100.0)	39(100.0)	40(100.0)
χ ² 検定		(*)	**	
(全体 χ ² =20.48*)			*	
		**		

** p<.01, * p<.05, (*) p<.10 (以下同様)

† ()内は%

言も上村に比して多くみられる。上村は「依存」の傾向の強さが目立つ程度である。このカテゴリーをまとめてパターン化した場合、両群の間に有意差はみられなかった。両地域とも、子どもに安心して将来を託している者は極めて限られているのである。なお、図1における水上の安定的な発言の多さは、その多くが同一対象者の中で不安感とか投げやりの態度と平行して示されているために、有意ではないが、水上におけるアンビバレントな態度の強さとなってあらわれてきているようである。

附表2の下欄に、このパターンの出現数を年齢別・職業別に示した。両地域とも、60歳代では安定群が多く、40歳代ではアンビバレント群と悲観群が多いが、50歳代では、上村に悲観群、水上に安定群がそれぞれ多くなっている。職業に関しては目立った差異がなかった。農業の場合は経営規模のちがいが大きな要素となろうが、こ

こでは確められなかった。

ii) 後継者としての役割意識について

自分の子どもが、後継者としてどのような役割意識をもっているかについての、親の認知のあり方がここでは取りあげられることになる。家業を引き受けていくつもりかどうかを中心にして分析してみると、図2、表6および附表3が得られた。

ここでは、2地域の間、パターンによる分析で有意差がみられており(表6)、図2によれば、水上の場合、積極的な役割受容を認めている者が多い反面、自己中心的傾向(自立への志向性なども含む)や出稼ぎ志向、都市生活志向などを認める者が、上村に比して多くなっており、態度の分極化、アンビバレント傾向の強さが目立つように思われる。それに対して、上村は、村生活(農業)拒否と認知する者が目立つ。都市生活志向や

いわゆる過疎地域の家族関係 (10)

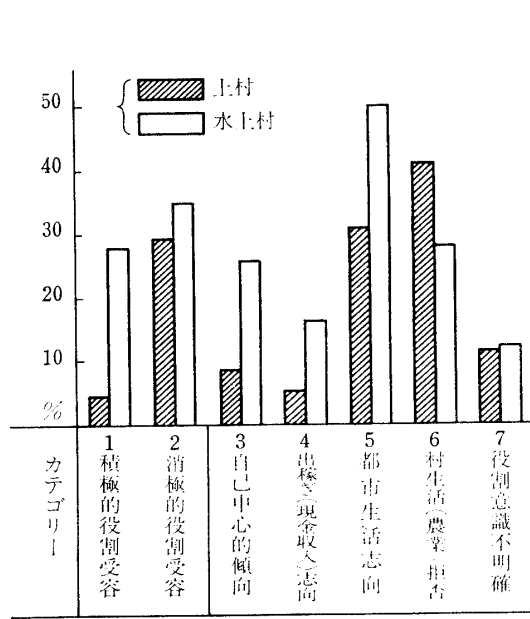


図2 後継者としての役割意識についての親側の認知

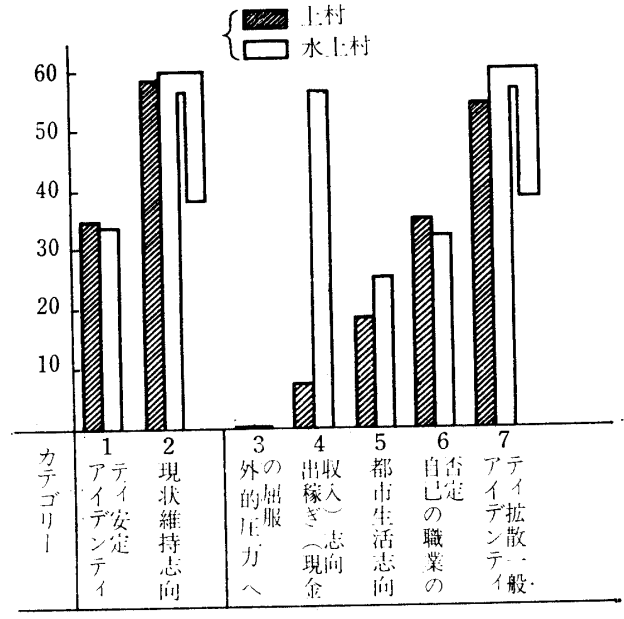


図3 世帯主の職業人としてのアイデンティティ

表6 後継者としての役割意識についての親側の認知 (パターン・4 地域)†

パターン 群	上 村	水上村	頓 原 町	大蔵村沼台
A. 受 容 群	11 (15.3)	7 (15.9)	4 (10.3)	5 (12.5)
B. アンビバレント群	12 (16.7)	16 (36.4)	9 (23.1)	13 (32.5)
C. 拒 否 群	34 (47.2)	18 (40.9)	13 (33.3)	12 (30.0)
D. 不 明 群	15 (20.8)	3 (6.8)	13 (33.3)	10 (25.0)
計	72(100.0)	44(100.0)	39(100.0)	40(100.0)

χ²検定 (*)
(全体 χ²=15.60)

† ()内は%。

消極的役割受容と認知している者は、水上に比しては少ないが、比率自体としては高くなっている。上村の場合、子どもの役割意識のとらえ方において、自己否定的感情が優先している所に特徴が見られるとあってよいであろう。

附表3に関しては、60歳代以上の群が、両地域共に、子どもが拒否的であると認知していることは興味のある点である。附表2の結果とあわせ考えると、「いやいやだけれども、子どもは残って自分の面倒を見てくれる」ことに一致しているのである。

表7 世帯主の職業人としてのアイデンティティ (パターン・4 地域)†

パターン 群	上 村	水上村	頓 原 町	大蔵村沼台
A. 維 持 群	22 (30.6)	4 (9.1)	3 (7.7)	8 (20.0)
B. アンビバレント群	30 (41.7)	33 (75.0)	21 (53.8)	23 (57.5)
C. 欠 如 群	15 (20.8)	6 (13.6)	10 (25.6)	6 (15.0)
D. 不 明 群	5 (6.9)	1 (2.3)	5 (12.8)	3 (7.5)
計	72(100.0)	44(100.0)	39(100.0)	40(100.0)

χ²検定 (**)
(全体 χ²=67.08)

† ()内は%。

iii) 職業人としてのアイデンティティについて
結果を図3、表7および附表4に示した。

図から知られるように、両地域に共通して、なんとか現状でやっている、あるいは、やっていけそうだ、といった現状維持志向的な態度と、反対に、見通しを持ち得ず混乱している状態を示すアイデンティティ拡散とが、著るしく高い値を示している。表7からみて、安定したアイデンティティを持っているのは、上村には30.6%も見られるのであるが、水上の場合はわずかに9.1%であり、極めてアンビバレントな、不安定な状態にある者が多くなっている。

附表4からすると、年齢段階や職業区分による差はあまり認められず、水上の場合とはくに、すべての群でアンビバレントな態度が目立っている。

iv) アイデンティティと役割期待に基づくパターンの分析

アイデンティティに関する応答のパターンと、役割期待に関する応答のパターンを交叉させて、6種のパターンに分け、地域間の差異を見たのが図4および表8である。

上村と水上の2地域間には有意差がみられており、図4からすると、上村には、水上に比して、現職志向安定型、現職志向将来不安型およびなげやり型が多く、水上には、現職不安子ども依存型と、とまどい不安定型、不安定孤独型とが多くなっている。このパターンから見る

かぎりでは、上村の方が、安定的な者と破局的な者との分極化が進みつつあるように思われる。この点については、全体的考察の中でさらに検討したい。

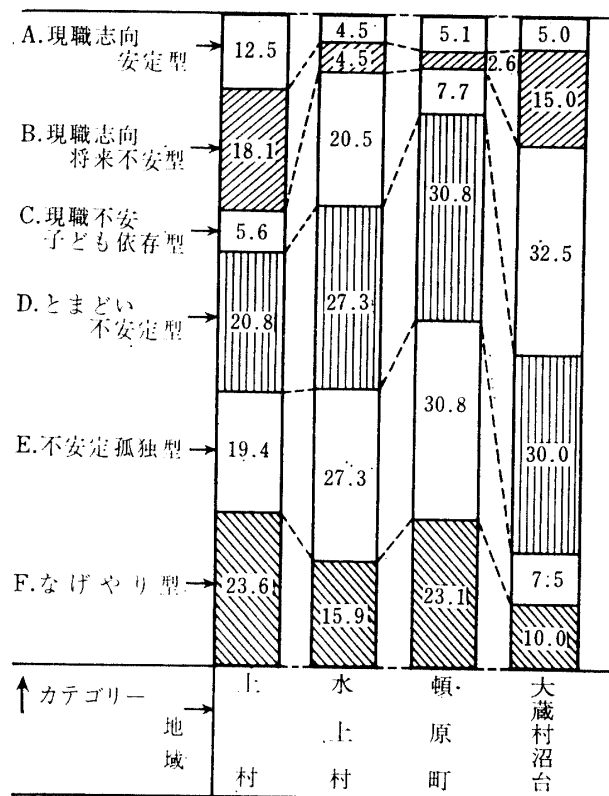


図4 アイデンティティと役割期待に基づくタイプ(%)

表8 アイデンティティと役割期待に基づくタイプ分類 (事例数)

タイプ	応答パターン†		地域別					後継同居男子††		職業†††			年齢†††			
	アイデンティティ	役割期待	上村	水上村	頓原町	大蔵村	沼台	計	有	無	農業	林業	その他	40才以下	50才代	60才以上
A. 現職志向安定型	+	+	9	2	2	2	15	13	2	9	2	4	5	4	3	3
B. 現職志向将来不安型	+	±・-	13	2	1	6	22	14	8	9	7	6	7	7	6	2
C. 現職不安子ども依存型	±・-	+	4	9	3	13	29	27	2	22	3	4	3	6	12	8
D. とまどい・不安定型	±	±	15	12	12	12	51	34	17	32	9	10	20	7	10	14
E. 不安定孤独型	±	-	14	12	12	3	41	22	19	23	4	14	18	9	4	10
F. なげやり型	-	±・-	17	7	9	4	37	18	19	19	4	14	10	8	3	16
計			72	44	39	40	195	128	67	114	29	52	63	41	38	53
χ ² 検定			* (全体χ ² =36.47**)					** χ ² =20.05		** χ ² =7.24			** (40・50・60 χ ² =20.02*)			

† 表5および表7に基づく。「不明」は±に含めた。

†† 「有」は年齢や同胞順位を問わず、同居している場合すべてを含む。

††† 職業・年齢の区分については、これまでの表に準ずる。

2. 対応事例による2地域間の比較

前報告(松田ほか, 1972)でも見られるように, 両地域間の質的な比較を行なうために, ここでも, 各年齢段階ごとに事例をとりあげ, その具体的なコメントの中から, 上で得られた量的な分析を裏づけるような資料を得ることを意図した。

事例を選定するにあたっては, 水上の田畑山林の経営規模が不明であったので, 一応職業を農業としていることを1つの基準としたほかは, 前報告と同様に, 家族構

で生きるしかないと思う(102³)」ように, 林業で何らかの期待をつなごうとする構えが見られる。しかし, また, 「林業だけでやっていく人もない, 百姓だけでやっていけるという人もいない(34)」と考え, 「もう蚕もあまりいい収入にならないが, しょうがないから蚕を飼っているといったところだ(67)」と否定的な感情を示す。息子が運転手(ジャリ運搬)をやってとび歩いている(61)ことによって生活の基盤が辛うじて支えられていることを考えると, 柳になっている畑・山林を捨てて

表9 各タイプに属する事例一覧*

	上 村	水 上 村	頓原 沼台
A	106, 110, 116, 140, 144, 147 151, 153, 154	523, 527	
B	101, 102, 104, 105, 113, 114 117, 122, 131, 135, 146, 149 170	502, 538	<u>217</u>
C	128, 133, 152, 158	509, 516, 517, 518, 525, 528 539, 543, 544	<u>210</u>
D	109, 119, 123, 125, 137, 157 159, 160, 161, <u>162</u> , 163, 167 173, 174, 176	505, 510, 512, 521, 526, 529 531, 532, 533, <u>534</u> , <u>537</u> , 541	<u>405</u> <u>233</u> <u>407</u>
E	103, 107, 108, 120, 121, 124 127, 129, 139, 148, 155, 165 171, <u>172</u>	501, 503, 504, 506, 507, 511 515, 519, 524, 535, 536, 540	
F	111, 112, 115, 118, 126, 130 134, 136, 138, 145, 150, 156 164, 166, <u>168</u> , 169, 175	508, 513, <u>514</u> , 520, 522, 530 542	<u>410</u>

* 下線は, 次項で事例としてとりあげた対象家族の番号である。
頓原町及び大蔵村沼台については, 事例分析の対象家族のみを示した。

成, 特に後継者の有ることで対応している事例を, 各年齢区分毎にとりあげた。直接世帯主本人からの聴取であることなども条件とすると, 辛うじて必要な事例数が得られただけであった。ここで得られた2地域の6事例は, 前報告の事例の条件にもほぼ対応するものであり, 全地域間の事例の比較も, それなりに意味をもつと思われるものであった。選ばれた事例の位置づけを表9に示し, その各事例について, 分析に関連するコメントを附表5に示した。

i) 60歳代の事例について

両地域共に, 長男夫婦と孫とが同居している。上村の事例<168¹⁾>の場合, 山林が780aあって「この村は林業

都会で, とも思う。しかし, 「山や畑を売っていくといっても, 簡単に買ってくれる人がない(70)」し, また, 自分の代だけはここでの生活がなんとか維持できるという気持ちも, 発言の裏にひそんでいるように思われるのである。

水上の事例<537>の場合は, 長男が家で農業をしているのであるが, 本人は名古屋方面に建築関係の出稼ぎに出ており, 長男の嫁もまた近村の賃仕事に出かけているのである。「もう百姓ばかりでは立っていかない。田は減反されるし, 村にいても金とるものがないということで, ほとんど出てしまう(14)」と認めている。自分たちの場合, 「都会では皆が食べていけないから, ここ

1) 各事例の事例番号をあらわす。

2) 資料集におけるコメント番号をあらわす。

で百姓して、いくらか銭も取れるから、田舎の方が暮しいいということで居る訳(58)」であるが、子ども自体が、「先は百姓ではやりきれないと言っているから…とても継ぐというあれ(気持)はないだろう。…(80)」「会社に行こうと思えば行けるが、私たち年寄りだけを置いていくわけにもいかないだろう(81)。」

結局、両地域とも、自分の代だけはなんとかここで生活できる、ということをも唯一の依り拠としているのであるが、内から起ってくる不安感、現状をこれ以上は改善しえないというあきらめを、どうしようもなく受けとめているように思われる。

ii) 50歳代の事例について

両地域の事例ともに、結婚適齢の後取りをかかえて、嫁を得られるかどうか重要な要因としてとりあげられている。ただし、職業的な面では、上村の事例の長男が大工という技術を持っており、水上の事例の長男が農業を主体に考えている点で、若干の差異がみられる。

上村の事例<162>は「農業一本化では進めない(18)」と言いきっており、子どもが独立して出ていくことについて、「そういう国のやり方(83)」で仕方がないことだと認めているのである。そして、大工という技術をもった子どもがどこに生活するかが問題であり、「猫の尻尾の方はどこで暮したっていい。生活能力さえできれば、これからは…世界中結婚できるようになった時代だから(82)」と考えているのである。「養老院で余生を送るもいい(132)」といいながらも、今は、「猫の尻尾」として、猫の本体の動きについて動かされていく自分というものを想定しているとみてよいであろう。

水上の事例<534>は、現在の仕事そのものについては、子どもへの働きかけが効を奏し、「できるだけ本人に任せたい。嫁さんでも来てくれれば、煙草とかいろいろやってくれるだろう(91)」と、長男が積極的に取り組んでいることでの安定感を持っている。しかし、嫁の問題となると「むずかしい(7)」のであり、「親は貰わねばと思うのだが、本人任せだ(73)」と、不安な感情を見せるのである。

このように見ると、50歳代の事例においては、共に、子どもの現在の働きには、ある程度の満足感を持っており、結婚の問題で状況がどう変化するかということに不安を持っているとみてよいであろう。そして、水上の事例では、土地に結びついた農業を基盤にしているのに対し、上村の場合は、村や土地に束縛されない状況で問題を解決しようとしている点で、両者の相違を見ることが出来る。

iii) 40歳代の事例について

義務教育段階の男の子が居り、年配の親が同居している点で共通しているだけでなく、考え方の大筋においても、かなりの共通性が認められる。

上村の事例<172>の場合は、50歳代の事例の考え方も共通する面が多く、子どもが村を離れて帰ってこなくなることを、当然の現象として受けとめており(99, 105)、自分自身すら「ここに住むことは好まなかった(101)」のである。また、養蚕に対する考え方においては、60歳代の事例とも共通して、「唯一の現金収入という養蚕しかないのやっている。養蚕以外に割に合うものがあれば、養蚕はやめてしまう(7)」というように、極めて否定的な見方をしている。このように、上村では、年齢段階こえて、共通した構えが見られるようである。

学校教育を重視しようとするのは、両地域の若い世帯主に共通する態度であり、上村の事例<172>では、「本人がしっかり勉強して高校に行くといえば、全部出してやらなければいけないと思っている(96)」のであり、水上の事例<534>では、「子どもにしっかり勉強せよと言っており(47)」、高校まで「是非進学させたいと考えている(50)」「水田を今の半分にしてもいいと思っている(51)」とすら述べるのである。

そして、子どもが将来どのような方向へ向うかについても、共に何らの見通しも触れられておらず、少なくとも、自分の後を継いでくれることの期待は述べていない点でも共通している。このことは、上に挙げた上村の事例の発言(101)や、水上の事例における「年寄りはやはり生まれた所から離れられない。…やむなくここに居る。だから親が死ねば出ることになっている(60)」といった発言から十分に裏づけられるものである。

iv) 対応事例全体を通して

ここでとりあげられた事例は、面接調査の対象となった2地域の家族の中では、平均ないしはやや恵まれた社会・経済的地位にある方だと見てよいであろう。年齢段階ごとの共通性は、すでに上で述べてきたところであるので、ここでは地域的な特徴についてとり出すことにする。

まず上村の場合は、生活の基盤の不確かさを訴える点で共通している。「林業だけでやっていくという人もいない、百姓だけでやっていける人もいない(168-34)」¹⁾「ほとんどのこの辺の人は土方作業だ(168-35)」といった意見が共通してみられるのである(162-18, 172-46, 47)。「何らかの形で、ここが改革されるか、天変

1) ゴチックは事例番号であり、その右の数字はコメント番号である。

表10 調査 KASC による親の子どもに対する態度†

カテゴリー	2. 「父は私に」				24. 「母は私に」			
	上村中		水上中		上村中		水上中	
	男	女	男	女	男	女	男	女
A. 受容的態度	6 (13.6)	6 (13.3)	26 (18.1)	29 (19.9)	6 (13.6)	7 (15.6)	27 (18.8)	26 (17.8)
B. 受容的行動	7 (15.9)	7 (15.6)	5 (3.5)	9 (6.2)	5 (11.4)	3 (6.7)	4 (2.8)	6 (4.1)
C. 親和的援助的コミュニケーション	6 (13.6)	8 (17.8)	15 (10.4)	18 (12.3)	1 (2.3)	3 (6.7)	3 (2.1)	18 (12.3)
D. 葛藤	1 (2.3)	3 (6.7)	9 (6.3)	15 (10.3)	0	2 (4.4)	5 (3.5)	8 (5.5)
E. 統制的叱責的態度	2 (4.5)	2 (4.4)	23 (16.0)	22 (15.1)	0	2 (4.4)	19 (13.2)	19 (13.0)
F. 勉強の強制	10 (22.7)	6 (13.3)	26 (18.1)	10 (6.8)	14 (31.8)	7 (15.6)	32 (22.2)	14 (9.6)
G. 仕事の強制	4 (9.1)	2 (4.4)	5 (3.5)	2 (1.4)	2 (4.5)	5 (11.1)	12 (8.3)	8 (5.5)
H. 人格面での期待	3 (6.8)	2 (4.4)	4 (2.8)	13 (8.9)	8 (18.2)	8 (17.8)	16 (11.1)	11 (7.5)
I. その他	5 (11.4)	9 (20.0)	31 (21.5)	28 (19.2)	8 (18.2)	8 (17.8)	26 (18.1)	36 (24.7)
計	44 (100.0)	45 (100.0)	144 (100.0)	146 (100.0)	44 (100.0)	45 (100.0)	144 (100.0)	146 (100.0)
χ^2 検定	L *		J L *		L *		J L ** J *	

† ()は%

地変でも起らないかぎり、ここで収入を得ることは不可能だ(172—100)」という発言は皆の気持を代表するものであり、60歳代の者すら、自分の畑や山林を「買ってくれさえすれば、出たいと思う。便利のいい所に住んだ方がいいように思う(168—72)」のである。

一方、水上の場合、基本的な点では上村と共通する面が多いのであるが、水上のみに見られる側面を取り出せば、次のようなものであろう。すなわち、50歳代の事例に特徴的に見られたことであるが、「子どもに希望をもたせて、『…10人が10人都会で成功するものではない。…その気があれば、農家でも立っていけるはずだ』と言ってやった(534—90)」といった農業志向的な構えの存在である。60歳代や40歳代では、志向性というにはあまりにも弱いのであるが、「ここでは百姓していくらか銭も取れるから…(537—58)」とか、「折角乗がかかった仕事だから…(514—44)」, 「もう百姓ばかりでは立っていかない(537—14)」ことを自覚しながらも、農業経営を捨てきれず、なんとか維持していこうとする構えが見られるのである。

これらの結果は、特に水上の場合について、前節で検討した役割期待やアイデンティティの状況を十分に裏づけるものと見てよいであろう。

3. 文章完成法調査 KASC による2地域間の比較 —— 中学生について ——

方法および手続きの項で述べたように、上村と水上の中学生全員に対して、文章完成法形式の調査 KASC¹⁾を実施した。項目が多岐にわたるために、ここでは前節で行なわれた分析の観点に対応するような9項目に限定し、i) 親の子どもに対する態度の認知、ii) 都会と農村への志向性、および都会人・農村人観、iii) 将来への志向性、の3側面から分析を行なうことにした。

応答の内容を分類するために設けたカテゴリーおよびその内容例を、附表6に示した。

なお、上村中の生徒数が少ないために、以下の検討においては、すべて、1年生から3年生までをあわせた全数が取り扱われている。

1) 調査内容は附表1に示した。

i) 親の子どもに対する態度の認知について

調査 KASC における「父(母)は私に」という項目に対する応答は、表10に示したように9カテゴリーに分けることができた。

検定の欄に示したように、上村中の男女間には有意差が見られていないが、水上中では男女間に差が見られる。水上中の男女間の差が強く見られる項目を取りだすと、父親の場合、女子に対しては葛藤的な態度と人格面での期待が多くなっているが、男子については勉強の強制が著しく多くなっている。母親の場合、男子に対する勉強の強制がさらに強く、女子に対しては親和的コミュニケーションが多くなっている。

地域的な差としては、同性間のみを検討したのであるが、父親については男子の間のみ差がみられ、母親については、男女ともに地域差がみられる。地域差に効いている項目を見ると、男子の場合は、統制的・叱責的態度が、両親ともに水上の方に多くなっている。女子の場合も、やはり両親の統制的・叱責的態度の強さが水上において目立っており、それ以外に、母親の親和的援助的コミュニケーションが水上の方に多いこと、母親の人格面での期待が上村に多いこと、などがみられる。

一般的な傾向を見るために、カテゴリーをさらに大きく受容的態度と統制的態度にまとめて示したのが図5であり、その中で、特に勉強と仕事に関する働きかけを取りだして示したのが図6である。

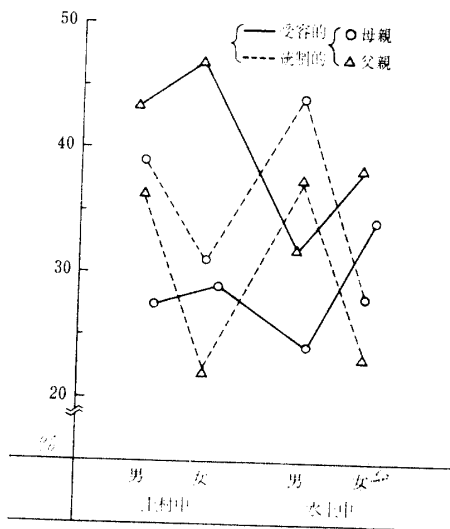


図5 KASC による親の子どもに対する態度：受容的態度 (A+B+C)† と統制的態度 (E+F+G)† について
† 表10のカテゴリーによる。

図5からは、両地域男女ともに、母親よりは父親の方が一貫して受容的であり、逆に、父親よりは母親の方が一貫して統制的であると認知していることが明らかである。さらに、上村中の子どもが、男女ともに、母親より

も父親をかなり受容的だと見ていること、また母親については、水上中の女生徒のみが著しく受容的と見ていること、統制的なかわりは、上村・水上ともに、また両親ともに、女子よりも男子の方に多く向けられていること、などが知られる。

この中で、上村中の父親にみられる受容的態度の強さは、非常に特徴的な傾向である。前節で見てきたような、職業人としてのアイデンティティの欠如、また、子どもには後を継がせることは考えず、進学させ、自分の生活を切り開くことを期待している親の側の態度と、この子どもの認知との間に、かなり密接な対応があると考えて良いように思われるのである。

上記の資料の中から、特に勉強と仕事に関する統制の状況のみを取りだして示したのが図6である。

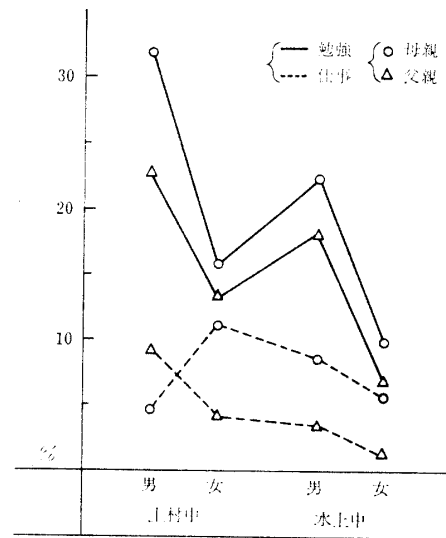


図6 親の子どもに対する勉強の強制(F)と仕事の強制(G)について

男の子どもに対して、仕事を手伝わすことよりも勉強を求めるのは、両中学に共通した傾向であるが、上村の母親の場合、その傾向がより強調されてあらわれている。すなわち、女の子どもに対しては、勉強と仕事とが相半ばしているのに対し、男の子どもに対しては、仕事の手伝いをほとんど求めず、勉強することをひたすら求めているのである。水上の場合も類似した傾向はみられるが、上村においてはそれが際立っているといえてよいであろう。

具体的な顕われ方においては違いがあるにしても、特に男の子どもにとっては、絶えず勉強のことをうるさく言う「教育ママ」の存在が意識されているのではなかろうか。女の子どもに対しては、将来の自立の要求や期待も男子に対するほどには強くないために、勉強があまり強調されていないようである。

この結果は、前節で述べてきた親の子どもへの期待、特に中学生の子どもを持つ40歳代の親の期待を、子ども

表11 調査 KASC による都会と農村への志向性†

↓カテゴリー	5. 「大都会」		26. 「この村」		11. 「都会の仕事」		18. 「農業」	
	上村中*	水上中	上村中	水上中	上村中	水上中	上村中	水上中
A. 積極的志向性	12 (13.5)	47 (16.2)	8 (9.0)	21 (7.2)	3 (3.4)	32 (11.0)	8 (9.0)	28 (9.7)
B. 肯定的表現	2 (2.2)	7 (2.4)	31 (34.8)	151 (52.1)	18 (20.2)	51 (17.6)	13 (14.6)	34 (11.7)
C. 葛藤	8 (9.0)	14 (4.8)	6 (6.7)	7 (2.4)	6 (6.7)	17 (5.9)	9 (10.1)	7 (2.4)
D. 消極的否定志向性	29 (32.6)	98 (33.8)	1 (1.1)	9 (3.1)	10 (11.2)	43 (14.8)	14 (15.7)	70 (24.1)
E. 否定的表現	30 (33.7)	99 (34.1)	29 (32.6)	52 (18.0)	27 (30.3)	74 (25.5)	31 (34.8)	89 (30.7)
F. その他	8 (9.0)	25 (8.6)	14 (15.7)	50 (17.2)	25 (28.1)	73 (25.2)	14 (15.7)	62 (21.4)
計	89 (100.0)	290 (100.0)	89 (100.0)	290 (100.0)	89 (100.0)	290 (100.0)	89 (100.0)	290 (100.0)
χ^2 検定	2.40		16.15**		6.13		13.67*	

† 男女間に有意差が見られなかったので合成した。()内は%。

が十分に認知し、意識化していることを示すものと思われる。

ii) 都会と農村への志向性、および都会人・農村人観について

この項に関しては、男女間に目立った差異はみられず、有意差も示されなかったため、男女をあわせて2地域の比較を行なうことにした。

表11の志向性についてみると、「大都会」および「都会の仕事」に関して両地域間に有意差はみられなかった。共通した特徴としては、両項目について積極的な志向性ないしは肯定的な態度を持った者は極めて少なく、消極的志向性ないしは否定的態度が目立っていることが指摘できる。

「この村」と「農業」については2地域間に有意差が見られた。「この村」については、水上の約60%の者が肯定的な態度を示しているのであるが、上村の場合は肯定的な者が約44%であり、逆の否定的態度も34%程度みられている。「農業」については、上村の場合、「葛藤」への分類が多くなっており、水上の場合、消極的否定的志向性が高くなっているなど、「この村」への志向性とは幾分異なった結果が得られている。

この調査の対象となった中学生のほとんどが、卒業後は都会へ出ていくことになるのであろうが、都会への志向性そのものは極めて弱く、親たちの、「若い者は都会

へ出たがる」といった心理的レベルのみでの理解が、必ずしも当を得ていないことを示唆するものである。

その点をさらに検討するために、表12に、都会人観および農村人観をまとめた。

「大都会の人」については10%レベルで、「この村の人」については5%レベルで、2地域間に有意差がみられた。「大都会の人」を、上村中学の生徒は、肯定的にとらえることが比較的多く、また、環境の否定的要素を挙げて(例えば「スモッグで可愛そう」など)、拒否的というよりは同情的に近い見方を示すことが多いのに対し、水上中学の生徒は、都会の人を人格面で否定的にとらえること(「無責任」とか「根性がない」など)が著しく多くなっている。

一方で、「この村の人」については、両地域間にあまり差はなく、半数以上の者が肯定的な記述をしており、否定的な見方は共に少なくなっている。なお、環境の否定的要素を記述する傾向が、ここでも上村の方に多く見られるようである。

これらのちがいは、印象記述的であるが、上村が水上に比して、地勢・気象条件などでより厳しく、一方で大都会への物理的距離の近さ、さらには親戚などの交流を通しての心理的距離の近さ、さらには、自分が都会に住まなくてはならないということの現実感の違い、などによって説明されるのではないと思われる。

表12 調査 KASC による都会人・農村人観†

項目→ ↓カテゴリー	19. 「大都会の人」		14. 「この村の人」	
	上村中	水上中	上村中	水上中
A. 肯定的表現	10 (11.2)	19 (6.6)	49 (55.1)	164 (56.6)
B. 生活様式のやや否定的側面	13 (14.6)	35 (12.1)	2 (2.2)	7 (2.4)
C. 人間関係の否定的側面	16 (18.0)	52 (17.9)	5 (5.6)	23 (7.9)
D. 人格面の否定的側面	7 (7.9)	69 (23.8)	7 (7.9)	21 (7.2)
E. 環境の否定的要素	24 (27.0)	58 (20.0)	9 (10.1)	5 (1.7)
F. 葛藤	6 (6.7)	17 (5.9)	5 (5.6)	28 (9.7)
G. その他	13 (14.6)	40 (13.8)	12 (13.5)	42 (14.5)
計	89(100.0)	290(100.0)	89(100.0)	290(100.0)
χ^2 検定	12.56(*)		14.86*	

† 男女間に有意差がないため合成した。()内は%。

iii) 将来への志向性について

「将来私は」という項目に対する応答から、ここでは、子どもが将来に対して、どのような展望なり志向性なりを持っているかを明らかにしようとする。結果を表13に示した。

男女をあわせた場合、2中学間に有意差がみられ、男女を分けた場合、男子については2中学間に10%レベルで差があり、それぞれの学校の男女間に差が見られた。

全体を通しては、広義の「技術・専門職(大工・看護

婦・理容師が多い)」になりたいとする者が多く、次に、立派な人・役立つ人といった「人格的側面や抽象的記述」の者が多い。さらに、「建築家」とか「デザイナー」といった、どちらかという「非現実的・タレント的な職業」を志向する者も多く見られる。

このような全体的な傾向の中で、上村中の男子の場合には、「人格的側面や抽象的記述」が目立って多く、水上中の男子に比して、良くいえば理想追求的、悪くいえば観念的な傾向が強いように思われる。一方、水上中の男

表13 調査 KASC による将来への志向性

項目→ ↓カテゴリー	12. 「将来私は」							
	上村中		水上中		長男のみ		農林業の長男	
	男	女	男	女	上村中	水上中	上村中	水上中
A. 技術・専門職	10 (22.7)	6 (13.3)	30 (20.8)	49 (33.6)	5 (20.8)	17 (22.4)	1	10
B. やや非現実的・タレント的職業	9 (20.5)	5 (11.1)	27 (18.8)	21 (14.4)	5 (20.8)	17 (22.4)	2	9
C. 都市生活または都市で可能な職業	2 (4.5)	3 (6.7)	12 (8.3)	10 (6.8)	1 (4.2)	8 (10.5)	1	3
D. 農山村生活または農山村の職業	2 (4.5)	0	15 (10.4)	2 (1.4)	2 (8.3)	8 (10.5)	0	6
E. 人格的側面や抽象的記述	16 (36.4)	10 (22.2)	26 (18.1)	28 (19.2)	8 (33.3)	9 (11.8)	3	2
F. その他	5 (11.4)	21 (46.7)	34 (23.6)	36 (24.7)	3 (12.5)	17 (22.4)	1	13
計	44 (100.0)	45 (100.0)	144 (100.0)	146 (100.0)	24(100.0)	76(100.0)	8	43
χ^2 検定	L * J		L (*) J		L * J		L (*)	
	L (*)		L (*)		L *		L (*)	
	(上村中：水上中*)							

子の場合、上村中の男子に比して、都市での職業への志向性の強さと共に、「農山村生活または農山村の職業」への志向性を述べる者が目立ち、より現実的な志向性を感じるのである。とくに、この「農山村の生活」への志向性の強さは、すでに得られた両地域間の親のアイデンティティの違いと考えあわせるとき、興味深いものがある。

なお、男子のうちで、長男のみを取りだした場合、および、その中からさらに父親の仕事が農林業としてある者のみを取りだした場合を、表13の右欄に示したが、男子全体とほとんど同じ傾向を示している。この中で、「農山村の生活」を志向する者が、上村中の場合は2名の長男だけであるのに、水上中の場合は長男の8名以外に、女子も含めてさらに9名も見られることは注目すべきであろう。

女子については、上村中の場合、技術・専門職を志向する者が相対的に少なく、「その他」が多くなっている。そのことは、将来への志向性が不明確であり、あったとしても、「外国へ行く」といった皮相的現象的記述で、男子の場合とは若干異なるが、やはり観念的なものが優先していると見てよいであろう。それに対し、水上中の女子は、技術・専門職への志向が多く、看護婦・理容師などの極めて現実的な職業が挙げられており、男子の場合と同様に、現実性が高いとあって良いであろう。

iv) 中学生における2地域間の差異についてのまとめ
KASCを通して、上村中および水上中の生徒の態度にどのような違いがあるかを明らかにしようとしたのであるが、いくつかの特徴的な傾向が明らかになった。

上村中の男子の場合、両親、特に母親から勉強するようにという強い要求があり、将来は都市において、立派に生きることが志向されているようである。その生き方はかなり観念的なものだと考えられた。女子は、その存在があいまいであり、志向性も明確でなかった。

水上中の場合は、男女ともに非常に具体的な、現実性のある生活が志向されており、また、村での生活を志向する者も幾分多く見られた。都市での生活に関して、上村中に比してやや否定的と思われる面が目立つが、これは、技術・専門職への志向性とあわせ考えると、大都会でなくとも生活できる、という読みに基づけられたものであるかもしれない。

B. 調査対象4地域の結果に基づく考察

1. 反応パターンに基づく諸特徴の比較

ここでは、すでに前節Aに表示されている4地域間の

差異に基づきながら、それぞれの地域の特徴をまとめていくことにする。

i) 後継者に対する役割期待について

表5に見られるように、山形県大蔵村沼台地区(以下「沼台」)が、他の3地域との間に有意差を示しており、上村と島根県頓原町(以下「頓原」)の間、および上村と水上との間には、いずれも有意差が見られていない。

この役割期待からみると、上村と頓原の間の共通性は高く、悲観的な見方(頓原38.5%, 上村43.1%)の者が多く、次いでアンビバレントな者(頓原33.3%, 上村29.2%)が多くなっている。沼台は、安定群の多さ(37.5%)が特徴的であり、アンビバレント群もかなり多い(35.0%)。すでに指摘したように、沼台は子どもに対して後を継ぐことにながりの期待を寄せているとみることができる。水上は、アンビバレント群の多さ(43.2%)が目立っており、しかも、安定群(25.0%)や悲観群(29.5%)も少なくないことから、便宜的に3次元空間での位置づけを考えれば、沼台と頓原・上村との中間ぐらいに位置づけられよう。

ii) 子どもの役割意識について

役割期待の場合とは異なり、上村と頓原、沼台と水上とがそれぞれ、やや近い特徴を示し、上村と水上とが対極をなしている感じである。すなわち、上村の場合は拒否群の多さ(47.2%)と、かなりの不明群(20.8%)とが特徴となり、頓原はこの両群が同じ比率(33.3%)で見られている。一方、水上は拒否群の多さ(40.9%)と共に、アンビバレント群の多さ(36.4%)が特徴的であり、沼台がそれと似た傾向(30.3%, 32.5%)を示している。そして、頓原と沼台間の類似性もかなり認められるのである。

しかし、いずれの地域においても、子どもの役割意識については、否定的ないし不明といった認知しか持ち得ない点では、これらの地域間の差異は、本質的にはあまり大きいものではないのである。

iii) 職業人としてのアイデンティティについて

水上と頓原との間に類似性が高く、アンビバレント群の多さ(水上75.0%, 頓原53.8%), 維持群の少なさ(水上9.1%, 頓原7.7%)が特徴的となっている。それに対して、上村は、維持群(30.6%), アンビバレント群(41.7%), 欠如群(20.8%)のいずれにも少なからず見られる点で、明らかに上の2地域とは異なっている。沼台は、アンビバレント群が多い(57.5%)が、維持群も少なからず見られる(20.0%)点で、上村と頓原・水上の中間に位置づけられよう。

iv) アイデンティティと役割期待の反応パターンから

図4を見たところでは、上村がもっとも特異な傾向を示しており、水上および沼台との間にそれぞれ有意差が見られた。そして、水上、頓原、沼台の3者の間には、いずれも有意差が見られていない。上村の特異さは、安定型および現職志向・将来不安型の多さと、現職不安・子ども依存型の少なさである。上村との対応で関係を見た場合、現職不安・子ども依存型の多い沼台が、もっとも離れたところに位置づけられることになる。

ここでは、さらに、表8に示したように、地域間の差を無視して、後継者の有無、職業別、年齢別の3点から検討を行なう。

後継者が同居しているかどうかについては有意差がみられ、後継者がある群の方に、現職志向安定型や現職不安子ども依存型が多くみられ、後継者のない群に、不安定孤独型やなげやり型が多くなっている。これは、当然すぎるほどの傾向といつてよいであろう。

職業については、農業と林業の間で、有意差は見られなかった。経営規模等がおさえられていないため、止むをえないであろう。

年齢については、40歳代と60歳代との間に有意差がみられ、60歳代では、現職不安子ども依存型が著しく多くなっているのに対し、40歳代では、不安定孤独型がかなり多くなっている。この差異については、次の事例を通してのまとめで、さらに検討を深めることにするが、そこでとらえられる特徴と十分に対応するものだということができる。

2. 事例による諸特徴の比較

前報告(松田ほか, 1972)において、頓原と沼台の2地域については、次のようにまとめられている。

頓原の事例では、一方では後継者に対して後を継ぐことに拒否的であろうことを予期し、他方では、政治の悪さの故もあって農業を維持していくことが困難であることを述べている。

沼台の場合は、後継者に対して不安感を持ち、甘やかしによるつなぎとめを考えているにしても、極端な破局感を感じずるまでには至っておらず、農業も、出稼ぎという形態の必要性を予期しながらも、なんとか持続しようとする構えがみられる。

さて、上村の場合、対象者全体の中では、安定した見通しの者も多いのであるが、農業の者に限定し、条件に合う対象を選びだしてみると、必ずしも安定した見通しは出てこない。60歳代の事例においてすら、自分の長男夫婦がとにかくここで生活し定着しているにもかかわらず

らず、村を離れて便利のいい所に住んだ方がいい、と述べているのである。若い世代では、時代の変化というものを意識し、この村での生活が成り立たなくなっていることを強く感じ、子どもにはできるだけ自由度を与えようとしている。

水上の場合、一方では、百姓だけでは生活していけないことを指摘しながらも、上村の場合とちがって農業経営を捨てきれないことを述べ、取り組む以上は積極的に、といった構えすら見られるのである。

事例の分析を通して、いくつかの問題点なり、傾向が明らかになってきているが、その1つは、沼台が、他の3地域とは異なった特殊性をもっている、ということである。前報告で述べた沼台の基本的な特徴は、他の2地域と比較してもなお明らかである。すなわち、すでに述べたように、沼台においては、農業がいわば自我の一部として取りこまれており、農業をすることは生活することの大前提になっているのである。他の3地域では、沼台とは異なり、程度のちがいがあれ、幾つか有りうる生活形態の1つとして位置づけられつつあり、他のよりよい生活を求めることに対する寛容さといったものが見られるのである。

第2の問題は、上村で、自己の職業に対するアイデンティティのあり方の一般的な傾向と、事例に示された不安定さとの間に、矛盾するものがみられることである。これは、1つは、すでに村内で生活できる者とできない者との分極化が進んでいるからだ、という見方、1つは、上村の人が、個人主義的な傾向が強く、子どもの世代をぬきにして、自分自身の在り方を考えることができたからだ、という見方、今1つは、上村の人たちに、いつでも不作であることを訴えるような防衛的構えが少なかったからだ、という見方などが考えられる。現在、それを確める方法を持たないが、上村の場合に、そういった生活態度の特殊な在り方といったものを感じるのである。

第3に特徴的なことは、地域を通して40歳代の事例に見られる共通性の高さである。この点も、すでに前報告で予測されたことを、新たな事例を加えて確認できたことになるのであるが、40歳代以下の親は、自分が現在従事している仕事について積極的に評価することができず、それを子どもに引き継がせようとは考えていないのである。沼台・頓原では現状否定的、上村・水上では教育志向的、といった微妙なニュアンスの違いはあるにしても、子どもに自由度を与えて自立を志向させ、自分自身の状況の改革はできないままに、孤独になったり、投げやりになったりしているように思われるのである。この傾向は、すでに前項の表8からも明らかであろう。そ

の点、60歳代以上の親は、いろいろ不安があるにしても、子どもに頼っていきえすれば、現状だけは維持されていくだろうといった、安易な気持が支配的だと考えられる。

IV 要約および討論

本報告は、まず、長野県上村と熊本県水上村を対象にした面接調査に基づいて、子どもへの役割期待、子どもの役割意識、本人の職業人としてのアイデンティティ等の観点について分析し、さらに、年齢段階別に事例的な検討を行なうとともに、中学生を対象に実施した文章完成法調査の分析をもあわせた上で、2地域間の差異を明らかにしようとした。

続いて、前報告ですでに一応の分析を終った島根県頓原町と山形県大蔵村沼台をあわせた、4地域についての比較検討を行なった。

結果として、上村は、全般にアイデンティティを維持している者が多いが、次の世代へのつながりを期待していない点で特徴的であった。また、内部的には、安定した群と不安定な群とが分極化していることが特徴として指摘された。沼台は、その点が対照的であり、アイデンティティはかなり拡散的な様相を見せながらも、最後は子どもをあてにしていこうとする構えが目立っている。水上と頓原は、アイデンティティも弱く、しかも、あまり子どもをあてにすることもできず、といった非常にアンビバレントな特徴を示しており、この2地域は、上村と沼台の中間的な性質をもつものとして位置づけられた。頓原は、事例の中などで、投げやりの発言が目立ち、その点で上村的な極の方により近く、水上は、なんとか農業を維持しようとするところで、沼台的な極の方により近いと判断された。

年齢段階の区分による検討はかなり重要な手掛りを示しており、事例の検討において、60歳代の者は、少なくとも自分の代だけはここで済むはずだ、という安定感があるのに対して、40歳代ではアイデンティティが欠如しており、次の世代への期待もあまりみられず、上村と水上では、教育に対する配慮として見られただけであって、それは、期待というよりは、子どもにより多くの自由度を与えるための条件づくりということで理解できるものであった。それだけに、自分を含めた将来についての具体的な見通しは持ち得ないままに終わっていたのである。なお、親の教育に対する熱意は、子どもの認知においても、KASCを通してとらえることができた。

ここで、得られた結果に関する2つの大きな問題について考察しておきたい。1つは、地域差の問題である。

前報告においては、東北型農村と西南農村との対比という形で頓原と沼台のちがいについて述べたのであるが、さらに中部山岳地帯に属する山村、および、より一層西南部に位置づけられる山村がつけ加えられたとき、そこに示されてくる地域差をどのように考えたら良いであろうか。

「西日本の人は商業性に富んでおり、利潤のあがらぬところならさっさと捨ててより有利な土地に移住する(今井, 1968)」と記述された時、それが島根県頓原町の資料については適合するが、熊本県水上村の場合は、うまく適合せず、もう少し屈折した心理があるように思えるのである。それは、例えば、中学生のKASCにおいても、水上中学の生徒が、将来は大工や理容師・看護婦になることを志向しながら、一方で「この村」を肯定的に記述していることや、事例としてとりあげた40歳代の人々が、自らは借金をして構造改善事業を進めながら(514-38)、一方では、「子どもには親の後継ぎをしなくてもいい」といっている。農協に借金がたまるだけだから(514-49)、と言い切っていることなどに見られるのである。そこには、すでに指摘されているように「冷静な打算で動くというよりも、気分の論理で行動するような印象(続ほか, 1971)」があるのである。いわば、反骨的で頑固一徹、いわゆる肥後モッコスの生き方(祖父江, 1971)が、現実の社会生活の変貌の中で、適切な判断を導き出し得ないままに混乱をきたしているといつて良いであろう。そして、この土地自体が、歴史的には離村先であるという事情(続ほか, 1971)や、利益追求という割り切った姿勢への心理的抵抗などから、アンビバレントな村へのつながりが生みだされているようである。

上村の場合は、4地域の中でも特に耕地面積が狭く、山林面積の比率が高い。そして、標高1,000メートルもの傾斜地にある村落の者も、対象者の中に数多く含まれているため¹⁾、山村的な特徴がより多く示されているのではないと思われる。すなわち、山林所有に関しては、戦前からの、持てる者と持たざる者との格差をそのまま持続しており、持たざる人たちは、焼畑、製炭から山林労務へと、辛うじて生活を維持してきたのである。そこに、アイデンティティを維持している者と、維持していない者との分極化が生じてくる明確な根拠があると見てよいであろう。

長野が教育県であり、長野県人が地位追求者(続ほか, 1970)であることについては、その原因については必ずしも明確ではないが、現象としては広く認められ

1) 下栗という部落であり、2回にわたる調査の対象72名中23名が、この部落に属している。

ているところである。その特徴は、世帯主の面接の中でも、子どもに教育の機会を与えようとする構えとしても示されているが、それ以上に、中学生の KASC の結果の中で顕わになっている。

すなわち、上村中の結果には親から勉強するようにと強制されることの多さが示されており、さらに、水上中の生徒が現実的な職業においてしか将来を述べえないのに対し、上村中の生徒は、将来、「立派な人」や「役に立つ人」になることを志向しているのである。

このように、過疎化という同じ現象が示されながら、そこに働いている契機にはかなり地域差が見られるのである。この地域差が、さらに離村とか留村の形態そのものにどのように影響を及ぼしてくるかということは、今後の問題ということになるであろう。

第2の問題は、いわゆる過疎化の進行と、それに伴う家族関係の変化の見通しについてである。われわれは、いわゆる過疎現象を先行変数とし、家族関係を後続変数として分析を進めることを意図してきた。その意図は、これまでの分析の中で、十分に満たされたとは言い難い。しかし、今後さらに、過疎状況がどのように展開するか、そしてまた、それに伴って家族関係がどのように変化するか、ということについて、ある程度の見通しを立てておくことは必要であろう。

このことは、これまでに分析して得られた資料のみから論ずることも可能であるが、ここでは方法上の問題を中心にして、他の資料との関連で考えてみたい。

問題を解明していくための方法の1つは、すでに都市へ流出していった人たちが、都市環境の中で、また、出身地とのつながりの中で、どのような生活を営んでいるか、また、どのような家族関係を展開しているか、ということについて、追跡的な研究を行なうことであろう。

この都市での追跡調査の結果(久世ほか、準備中)、その一部分を、筆者が分担したところは平行してまとめられているが、離村者の中に、都市の中で十分に安定した基盤をつくり、将来とも都市生活を志向している者もあれば、また、将来、出身地へ帰ることを予期していたり、帰ることを志向している者も、同時に存在していることが示された。そして、後者の場合、多分に都市生活での不適應感を持っているが、それでもなお、生活の基本になる「教育」「収入」などの面では、都市の利点を認めざるを得ない状況であることなどが示されている。

このことは、前報告でも触れたように、「家族のエゴイズム」が露呈されてきているということでもあれば、また、家族が、自らの決意において生活の場を選びとっているといった主体的な動きとして認めることもできる

のである。そして、一貫して見られる教育への強い要求の中には、子どもにはさらに、その主体的な決意の場の自由度を拡大してやろうとする配慮を読みとることができるのである。

このような状況の中で育まれてくる子どものエゴイズムが、どのように形を変えていくかは、まさに教育の今日の問題であるが、ここでは、そうした関連性を指摘するにとどめたい。

方法の第2のものは、いうまでもなく、留村者の追跡調査である。世界の社会・経済情勢が目まぐるしく変動していく中で、いわゆる過疎地に生活する人たちの考え方の中にも、次々と変化が生じてくることは当然のことである。

林道(自動車道路)の開通という状況の変化が、村の人たちにどのような変化をもたらしているかをとらえる目的で、再び長野県上村を訪ずれたのであるが、¹⁾その際の限られた範囲での面接調査の中でも、単に搬出が楽になり、費用が軽減された、ということだけでなく、外材の輸入量の減少ということもあって、再び林業への見通しを持ち、造林への意欲が語られたのであった。

また、おそらく、最近の「農業・農村整備近代化に関する提言」²⁾に示された、世界の食糧危機など対応して国内農業を再編成しようとする動きも、良かれ悪しかれ、各過疎地に大きな衝撃を与えるであろう。

このような情勢の著しい変化に対応しながら、これまで家業として農業や林業を受け継いできた人たちが、それらを選びとるべき職業の1つとして位置づけていくようなことがどのようにして可能であろうか。また、そうした位置づけの上に立って、次の世代とどのようにかわっていくことができるか。このような問題については、これまでのわれわれの分析の中では明らかにされず、今後に残されることになった。

付記：本研究は、故続有恒教授を主宰者としてすすめられた過疎地域面接調査に基づくものである。ご生前のご指導を感謝しつつ、この小論をご霊前に捧げるものであります。(松田記)

- 1) 研究グループのうちの3名(松田、植村、鈴木)が、上村の下栗地区のみにおいて、10戸を対象に、1971年度調査以降の変化を中心に面接調査を行なった。なお、その際、愛知教育大学学生大島、河合両氏の援助を得た。
- 2) 朝日新聞 1973年11月30日(朝刊)

文 献

- 今井幸彦 1968 日本の過疎地帯 岩波新書
 久世敏雄ほか(準備中) いわゆる過疎地域の家族関係
 (12) 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 21.
 松田 惺ほか 1972 いわゆる過疎地域の家族関係(6)
 一子どもに対する役割期待について(その1)一名古
 屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 19, 81-94.

- 祖父江孝男 1971 県民性 中公新書
 続 有恒ほか 1970 いわゆる過疎地域の家族関係(1)-
 序報(その1)一名古屋大学教育学部紀要(教育心
 理学科), 17, 47-62.
 続 有恒ほか 1971 いわゆる過疎地域の家族関係(2)
 一序報(その2)一名古屋大学教育学部紀要(教育
 心理学科), 18, 17-32.

附表1 調査 KASC 項目

記入の仕方 「この紙をめくると、いろいろ書きかけの文章が並んでいます。それをみて、あなたの頭に
 浮かんできたことを、すぐつづけて書いて下さい。下の例(略)のように書いて下さればよ
 いのです。」

- | | | |
|-----------|---------------|------------------|
| 1. 小さい頃私は | 11. † 都会の仕事 | 21. いつも私は |
| 2. † 父は私に | 12. † 将来私は | 22. 嫁(よめ) |
| 3. 年寄り | 13. この世の中 | 23. 私がうらやましく思うのは |
| 4. 心配なことは | 14. † この村の人は | 24. † 母は私に |
| 5. † 大都会 | 15. 学歴 | 25. 中学生は |
| 6. 友だちは | 16. 家でよく話すことは | 26. † この村 |
| 7. 私が困るのは | 17. 私の楽しみは | 27. 父 |
| 8. 家 | 18. † 農業 | 28. 私の生きがいは |
| 9. もしも私が | 19. † 大都会の人は | 29. 青年は |
| 10. 母 | 20. お金 | 30. 私が知りたいのは |

† この9項目が本報告で分析の対象となった。分析のカテゴリーについては附表6に示した。

附表2 後継者に対する役割期待・態度

カテゴリー	上 村 (長野県)†									水 上 村 (熊本県)										
	事 例 数 (72)	コ メ ン ト 数 (24)	年 齢 水 準 別 (事例数)				職 業 別 (事例数)				事 例 数 (44)	コ メ ン ト 数 (17)	年 齢 水 準 別 (事例数)				職 業 別 (事例数)			
			40才 以下	50才 代	60才 以上	†† その他	農 業	††† 林 業	公 吏	そ の 他			40才 以下	50才 代	60才 以上	そ の 他	農 業	††† 林 業	そ の 他	
1. 信強	20	34	4	5	8	3	12	6	1	1	22	61	6	6	4	6	13	7	2	
2. 強批	19	38	7	1	5	6	10	5	1	3	18	29	8	4	2	4	11	5	2	
3. 批	6	8	4	0	2	0	0	2	1	3	5	8	1	2	1	1	1	3	1	
4. 不安を伴った期待	18	27	5	7	3	3	5	5	3	5	16	24	7	2	1	6	9	4	3	
5. 甘やかし	9	10	2	4	2	1	3	4	0	2	3	5	1	1	0	1	0	1	2	
6. 依混	26	35	10	4	5	7	12	6	1	7	8	11	4	0	1	3	2	2	4	
7. 混乱	6	6	3	0	0	3	4	1	1	0	10	14	3	1	1	5	5	1	4	
8. あきらめ	33	79	13	8	4	8	13	8	4	8	19	43	10	2	2	5	8	7	4	
9. 放任	20	33	9	6	1	4	8	4	3	5	20	37	11	2	0	7	10	3	7	
10. 孤立化	16	22	4	3	3	6	5	5	0	6	6	12	2	1	0	3	3	1	2	
11. 一般的援助	20	34	9	4	4	3	7	3	2	8	13	20	5	3	2	3	8	1	4	
計 (コメント数のみ)		326										264								
パターン	A. 安定		3	1	7	2	9	1	1	2			2	4	3	2	7	4	0	
	B. アンビバレント		9	4	3	5	8	7	2	4			8	2	2	6	9	6	4	
	C. 悲観		9	10	6	6	10	7	3	11			7	2	0	5	6	2	5	
	D. 不		3	0	2	2	3	2	0	2			0	0	0	1	0	0	1	
	計		24	15	18	15	30	17	6	19			17	8	5	14	22	12	10	

† 1970年および1972年の対象者がすべて含まれている。両年にまたがる事例については、両資料をあわせた結果である。

†† 世帯主以外の者(例えば妻等)に面接した場合である。

††† 農業の場合、面積の調査洩れ等があるため、経営規模別によることができなかった。また、林業については、林業労務と若干の自営林業とが含まれている。

附表3 後継者としての役割意識についての親側の認知†

カテゴリー		上 村 (長野県)								水 上 村 (熊本県)											
		事例数 (72)	コメント数	年齢水準別 (事例数)				職業別 (事例数)				事例数 (44)	コメント数	年齢水準別 (事例数)				職業別 (事例数)			
				40才以下 (24)	50才代 (15)	60才代 (18)	その他 (15)	農 業 (30)	林 業 (17)	公 吏 (6)	その他 (19)			40才以下 (17)	50才代 (8)	60才代 (5)	その他 (14)	農 業 (22)	林 業 (12)	その他 (10)	
A. 受容的役割反応	1. 積極的役割受容	3	4	2	1	0	0	2	0	0	1	12	29	5	4	0	3	9	3	0	
	2. 消極的役割受容	21	26	9	4	1	7	12	4	0	5	15	23	4	5	2	4	8	5	2	
B. 拒否的役割反応	3. 自己中心的傾向	6	9	3	1	1	1	3	3	0	0	11	20	5	2	1	3	5	3	3	
	4. 出稼ぎ(現金収入)志向	4	5	2	0	1	1	3	1	0	0	7	12	2	0	2	3	3	3	1	
	5. 都市生活志向	22	27	10	3	5	4	8	7	2	5	22	37	8	4	3	7	10	6	6	
	6. 暮らし(農業)拒否	29	41	9	9	8	3	8	8	5	8	12	16	4	1	4	3	7	3	2	
	7. 役割意識不明確	8	9	3	1	0	4	4	3	0	1	5	5	2	0	1	2	3	1	1	
計 (コメント数)		121										142									
パターン	A. 受容群			5	4	1	1	5	3	0	3			1	3	0	3	5	1	1	
	B. アンビバレント群			5	1	0	6	7	2	0	3			7	4	2	3	9	6	1	
	C. 拒否群			10	8	12	4	11	9	6	8			7	1	3	7	6	4	8	
	D. 不明群			4	2	5	4	7	3	0	5			2	0	0	1	2	1	0	
計				24	15	18	15	30	17	6	19			17	8	5	14	22	12	10	

† 表頭の内容については、すべて附表2に準ずる。

附表4 世帯主の職業人としてのアイデンティティの様相†

カテゴリー		上 村 (長野県)								水 上 村 (熊本県)											
		事例数 (72)	コメント数	年齢水準別 (事例数)				職業別 (事例数)				事例数 (44)	コメント数	年齢水準別 (事例数)				職業別 (事例数)			
				40才以下 (24)	50才代 (15)	60才代 (18)	その他 (15)	農 業 (30)	林 業 (17)	公 吏 (6)	その他 (19)			40才以下 (17)	50才代 (8)	60才代 (5)	その他 (14)	農 業 (22)	林 業 (12)	その他 (10)	
アイデンティティ維持	1. アイデンティティ安定	25	90	13	7	4	1	11	5	3	6	15	55	7	3	2	3	11	3	1	
	2. 現状維持志向	42	88	12	10	12	8	18	12	3	9	36	100	15	6	5	10	18	11	7	
アイデンティティ混乱	3. 外的圧力への屈服	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	4. 出稼ぎ(現金収入)志向	5	5	2	1	1	1	2	2	0	1	25	80	9	3	2	11	15	5	5	
	5. 都市生活志向	13	28	7	1	3	2	5	4	2	2	11	18	5	2	0	4	5	3	3	
	6. 自己の職業の否定	25	48	10	3	5	7	10	5	1	9	14	23	4	2	1	7	9	1	4	
	7. アイデンティティ拡散一般	39	111	14	7	9	9	17	9	2	11	36	132	15	6	5	10	20	10	6	
計 (コメント数)		370										408									
パターン	A. 維持群			8	6	5	3	8	7	2	5			2	1	0	1	1	2	1	
	B. アンビバレント群			10	7	7	6	13	7	3	7			13	5	5	10	18	9	6	
	C. 欠如群			6	1	3	5	5	3	0	7			2	1	0	3	3	1	2	
	D. 不明群			0	1	3	1	4	0	1	0			0	1	0	0	0	0	1	
計				24	15	18	15	30	17	6	19			17	8	5	14	22	12	10	

† 表頭の内容については、すべて附表2に準ずる。

附表5 長野県上村と熊本県水上村の対応例の比較

<p>上村60歳代 ≪F. なげやり型≫ ケース番号 <168> 64歳 農業 (田畑 66a, 山林708a) 家族: 妻 (60歳), 2男 (37歳同居, 31歳名古屋), 1女 (29歳名古屋), 長男の妻 (37歳), 孫1男 (6歳) 2歳 (9歳, 7歳)</p>	<p>水上村60歳代 ≪D. とまどい不安型≫ ケース番号 <537> 69歳 農業 (田70a, 畑30a<推定>) 出稼家族: 妻 (64歳), 4男 (38歳同居, 他は別居), 4女 (別居), 長男の妻 (38歳), 孫2男 (中1, 小5)</p>
<p>〔自分の家の家族関係〕息子は運転手をやって飛んで歩いている(61)。(息子はここに暮しながらいかがい?) いいということもなないが、私など、都会へ出て行くと思うとも、山や畑を売っていくといっても、簡単に買ってくれる人がいない(70)。</p>	<p>〔自分の家の家族関係〕息子はずっとここでややるか? そうだ(57)。都会では皆が食べていけないから、ここで百姓していくらか銭も取れるから、田舎の方が暮しいいということ居る訳だ(58)。(孫は?) できればせめて高校まではと(68)(良い会社の採用条件が)高校以上という風だから、高校だけ出してあげば、子どももいくらか楽になるのではないかとという考えだ(69)。(高校出た後帰って後継ぐことは)とてもむずかしいだろう(71)。会社にもやれば、帰ってこないだろう(72)。先が百姓ではやりきれないといっているから、子どももとても継ぐというあれはないだろう。私たちが年寄りがここに居る間は、ここに座っているといるわけではないか(80)。今、会社に行こうと思えば行けるが、私たちが年寄りだということを置いて行く訳にもいかないだろう(81)。嫁にはもう無理を言わないことに決めている(143)。</p>
<p>〔家族関係一般〕(この村で)長男が残って家をやって居るのは、わずか5~6戸程度だ(4)。(都会で働らいていても、親に問題が出てくれば帰ってこいと?) そういことを言っている人もあるが、結局、都会の便利のいい所へ行っている人は何とか都会がいいから、あっちへ家などを求めて、向うへ越したいという人があるらしい(13)。息子の方へ行かなくては仕方がないことだろう(15)。</p>	<p>〔家族関係一般〕男という男は、事情があって家から出られない者しか残っていない(16)。嫁をもらうと、姑の方がかえって心配するくらいで、昔と反対だ(143)。</p>
<p>〔若い世代について〕(若い人は都会へ?) 恐らく愛知県などへ出て行っている(11)。定年になって帰ってくる人も幾人かはあられるかもしれないが、向うの方へ若い者にみかかれて家を作ったり、財産を求めて引越すというふうな準備をしている人が相当いる。だから、帰ってくる人もないだろう(12)。</p>	<p>〔若い世代について〕食べ物から派手になっている(85)。自分たちがいて百姓でもしようというのは1人もいない(86)。今の中学生たちに(手伝い)しろといっても、しろという親の方が無理だ。今時分、俺が若い頃はこうだったといっても、(子どもは)昔の人はバカだと言う(142)。</p>
<p>〔職業について〕林業だけでやっていくという人もない、百姓だけでやっていくという人もない(34)。ほとんどのこの辺の人は土方作業だ(35)。(ほとんどの人が蚕をやっているのは)他のものをやっても合わないということだ。何でもかんでも蚕が一番いいんじゃないから蚕を飼っているといっただころだ(67)。山が20~30町もあるし、畑も5~6反あるから、まとめて買ってくれるという人もない。買ってこれさえすれば出て行きたいと思う。便利のいい所に住んだ方がいいように思う(72)。この村は林業で生きる道しかないと思う(120)。比較的この土地は肥えているから、20年くらいで切れる(106)。</p>	<p>〔職業について〕もう百姓ばかりでは立っていかない。田は減反されるし、村にいても金とるものがないということ、ほとんど出てしまふ(14)。こっちで働らいたって小遣い銭くらいだ(43)。大体50を過ぎれば会社は雇ってくれないから、田舎にいてポチポチやったり(自分の家は)畑もいれて1町ばかりだ(田舎にいては)百姓はやっていけないだろう(89)。(牛を飼っても)10万円くらい取るが、それは20カ月くらいかかかないと取れない。それが出稼に出れば、月5万ずつ取っても4カ月で20万円になるといっただ(94)。</p>
<p>上村50歳代 ≪D. とまどい不安型≫ ケース番号 <162> 55歳 農業 (田畑2ha, 山林128a) 家族: 妻 (49歳), 4男 (23歳同居 大工, 19歳・16歳名古屋, 中2), 1女 (26歳東京)</p>	<p>水上村50歳代 ≪D. とまどい不安型≫ ケース番号 <534> 52歳 農業, 家族: 妻 (51歳), 2男 (24歳同居, 15歳 農業高校), 1女 (川崎市), 父(78歳), 母 (76歳)</p>
<p>〔自分の家の家族関係〕(長男以外は皆出ていく?) そうだ(67)。(長男の結婚は)まだだ(78)。どこかで見て見つけられた方がいいが、なかなか。娘さんの方が田舎</p>	

って家族会議をするのだが、年寄りはやはり生れた所から離れられない。あまから強く自分の考えを出す親不孝になりますからな。やむなくここに居る。だから親が死ぬねは出ることになっている(60)。自分は22~23才頃から農業をやったが、自分が34~35才頃までは仕事をやることに對して父親がいろいろ小言をいうからな(81)。田舎では息子が35~36才までは父親が農林大臣で息子は兵隊だ(83)。なかなか完全にはまかせてくれなかつた。私が37~38才頃だと思ふ。私も嫁も何となく気まずい思いをしたことを覚えてる(88)。

〔家族関係一般〕今でも、結婚してすぐ財布を譲るといふことはないよ。若い者と年寄りといふいろいろの気まずいことがあるよ(89)。
〔若い世代について〕(長男が)6~7年したら何をやるかということ、大会社の事務をやるか、あるいは、父が畜産(以前9頭、今3頭)をやっているの、父の後を継いで赤牛の生産、それも2~3頭でなく何10頭かやる経営主になりたといふ(40)。ところが、近頃は大学を出て、学校の教員になりたいといふ。中学2年くらいではどうなるかわからない(41)。農学校へ行っている村の長男の場合、入学当初は学校を卒業したら農業をやるといふても、卒業すると、農業は全然やらずに就職してしまふ人が多い(69)。娘は百姓の家に嫁に行きたくないといふ(120)。

〔職業について〕(自分は)年中は農業にかかりきりではない。農繁期に他家から頼まれば、2日から5日間800円とか900円金をもらって手助けに行く。ときたま営林署に、月4~5日くらい働きの行く(37)。近頃は、農業構造改善とか林業構造改善とかいふて、植林を約1町歩、畜産(牛)をやったり、栗の植林を14~15町歩やっているが、今では元入れ元入ればかりで資金面で苦しい(38)。どうかして生活を楽にしていきたいと思つてやってみようと思つたとき農業改善の話があり、よろしくにいな(43)。…しかし、折角乗りがかかつた仕事だから…(44)。(向うにいい就職口があれば、村を出た方がいいと?)ええ、そう思ふ(74)。

てやらなければいけないと思つている…(96)。高校を出るといふことは、学業も大切だが、人間関係の面でも大切だと思ふ(98)。

ところが現在の状態のままではいふたら、子どもに戻つてこいといふ方が無理だと思ふ。戻つてきたところで、住むだけならいいが、何といつても生活するのが第1だから、生活できないところに人間がいても仕方がないと思ふ(99)。

私自身もここに住むことは好まなかつた(101)。(子どもが出てしまふ?)という時代が来るであろうから、今からその時の用意に、どこか都会に足場を作つておかなければいけないといふ考えは持っている。そして、子どもが成長してある程度になるまで、自分で暮らしていけるようになしなればいけないと思つている(105)。

〔家族関係一般〕(子どもが村へ戻るの)はまれである。子どもが出て行くと、親たちは、食べれるうちは食べていようといふことになる。そして、子どもが世帯を持って安定すれば、親たちはそちらへ行くことになる(22)。親たちに聞いてみると、いよいよよとなれば息子たちの所へ行くが、あまり都会には出たくないから、生活できるうちはこちらに居たいと言つている(79)。

〔若い世代について〕土方作業といふのを若い人は嫌う。土方作業といつても、車の運転ぐらいいいかやらない(50)。(若い人が出て行くのは)やっぱり仕事がないからだと思ふ(51)。考ふるより先に都会へ行つてしまふ。学校を卒業したばかりでは都会の厳しさは解らない。それでも、その厳しさを乗り越えたものは成功するが、そうでなくて落伍する人もいふ(127)。

〔職業について〕(養蚕は)昔はよくやつたが、最近採算が合わない。しかし、ここでは農業で、唯一の現金収入といふと養蚕しかないでやっている。養蚕以外に割の合うものがあれば、養蚕はやめてしまふ(7)。はつきりいへば、山林業専門で生活できる人は、ここにはいない(46)。現金収入といつても業種は決まつている。土方作業の他に仕事はない(47)。何らかの形で、ここが改革されるか、天変地変でも起らないかざり、ここで収入を得るのは不可能だ(100)。子どもがこちらで暮らすといへば、それらしく何かの職業といふか生活の根拠をもつように考えなければいけないと思ふ。しかし、現在の状態では、ここには、そんな生活の根拠になるようなものはない(106)。

附表6 調査 KASC の分析カテゴリー†

KASC 項目	カ テ ゴ リ ー	内 容 例	
2. 父は私に 24. 母は私に	A. 受容的態度 B. 受容的行動 C. 親和的援助的コミュニケーション	甘い, やさしい, よくしてくれる, やりたいことをやれ。 お金をくれる, いろいろ買ってくれる。 いろいろ話してくれる, 教えてくれる。	
	D. 葛 藤	やさしい時ときびしい時がある。	
	E. 統制的叱責的態度 F. 勉強の強制 G. 仕事の強制	きびしい, 怒る, 注意する。 勉強しろという。 仕事をいいつける, 手伝いをさせる。	
	H. 人格面での期待 I. その他	立派な人になれという。 無答, とりちがえ, その他。	
	5. 大 都 会 11. 都会の仕事 18. 農 業 26. こ の 村	A. 積極的志向性 B. 肯定的表現	とても好きだ, 発展させたい, 行きたい。 いい所だ, 楽な仕事だ, 空気がきれい。
		C. 葛 藤	空気は悪いが収入がいい。
		D. 消極的・否定的志向性 E. 否定的表現	行きたくない, 嫌いだ。 汚れている, 人が減っていく。
		F. その他	無答, わからない, その他。
		14. この村の人 19. 大都会の人	A. 肯定的表現
B. 生活様式のやや否定的側面 C. 人間関係の否定的側面 D. 人格面の否定的側面			派手, せわしそう。 競争, 薄情, 冷たい。 孤立, 無責任, 根性がない。
E. 環境の否定的要素	スモッグで大変。		
F. 葛 藤	いい人も悪い人もいる。		
G. その他	無答, わからない, その他。		
12. 将来私は	A. 技術・専門職 B. やや非現実的タレント的職業 C. 都市生活または都市で可能な職業 D. 農山村生活または農山村の職業 E. 人格的側面や抽象的記述 F. その他		大工, 看護婦, 理容師, 教師。 スチュワーデス, プロ野球, デザイナー, 建築家。 平凡なサラリーマン, 女中をしてみたい。 後継ぎ, 酪農。 立派な人, 役立つ人, 楽しい生活, 大きな仕事。 無答, わからない, 外国へ行く, その他。

† 本報告で分析の対象となった項目についてのみ示した。

STUDIES ON THE INTER- AND INTRA-FAMILY RELATIONSHIPS IN SO-CALLED "KASO"(TOO-THINLY-PEOPLED) COMMUNITIES(10)

— Householders' Role-expectancy to Their Own Children(2):
Comparison of Two Districts, Kami-Mura(Nagano Prefecture)
and Mizukami(Kumamoto Prefecture), and Discussion
on the General Trend Across Four Districts —

Sei MATSUDA, Toshio KUZE and "KASO" Group

The purpose of this report is, the same as the previous one published in last year, to analyze family relationships in connection with householders' identity about their occupations and role-expectancy to their own children. Data were collected on the basis of unstructured interview with the householders in four so-called "Kaso" (too-thinly-peopled) communities, and of KASC (sentence completion test for pupils in Kaso districts) administered to pupils of the middle schools in the two of the four districts.

Comparing householders' responses in the two districts, Kami-Mura(KM; Nagano Prefecture, Middle in Japan) and Mizukami(MZ; Kumamoto Prefecture, South-West in Japan), we could find some differences between them; the identity about their occupations was more ambivalent in MZ group than in KM group, but more confused in some of KM group than of MZ group; KM group had less reliable role-expectancy to their own children than had MZ group.

Differences among four districts, KM, MZ, ND (Yamagata Prefecture)[†] and TB (Shimane Prefecture)[†], were also discussed. ND group contrasted significantly to KM group in their stable reliance on their children. Similarities were found between MZ group and TB group in their ambivalent attitudes toward their occupations and their children.

The younger householders (forties or younger) across four districts had more confused identity about their occupations than had older. Especially, the younger ones of KM and MZ groups were eagerly to make their children receive higher level of education, which was also confirmed by the analysis of KASC responses.

Discussing about the factors affecting differences among districts and about the forecast of the Kaso phenomenon, the significance of follow-up study was suggested.

[†]cf. Matsuda, S. et al. (1972)